令和６年度入学試験問題

小　論　文

（国際地域学科地域教育専攻）

注　意　事　項

1　試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開かないこと。
2　「問題冊子」は１ページと 13 ページが白紙です。２ページから 12 ページが問題本文（〈問題文〉と〈資料〉）および設問です。
3　解答用紙は３枚、下書き用紙は２枚あります。
4　解答は指定された解答用紙に記入すること。
5　受験番号はすべての解答用紙の指定欄に記入すること。
6　解答は横書きとし、指定された字数にまとめること。
7　解答用紙のみを提出し、問題冊子・下書き用紙は試験終了後、持ち帰ること。なお、いかなる理由があっても解答用紙以外（下書き用紙など）は受理しません。
8　試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、手を挙げて監督者に知らせること。

問題 次の〈問題文〉および〈資料〉を読んで、設問1、設問2および設問3に答えなさい。

〈問題文〉

集団生活は息苦しくて、なんだか苦手。こんなことを思ったことはありませんか。閉鎖的で拘束力の強い集団は、「ムラ社会」などと呼ばれ、第二次世界大戦後、知識人から批判の対象となってきました。その背後には、集団的な社会が個々人の自由を損なってきたという考えがあります。「日本社会の集団的体質」と聞いて、良い印象を抱く人は、あまりいないでしょう。

ひるがえって、いまの社会を見ると、人びとは自由に、いろいろなことをできるようになりました。お金という制約がなければ、お休みの日に何を着て、何を食べるか、どこに行くかは自由です。進路や家族のあり方についても、自由に決められるようになりました。まさに、「人それぞれ」の時代と言えます。

しかし、「人それぞれ」の社会は、そう簡単には実現できません。「人それぞれ」にいろいろなことができるようになるためには、集団的体質から脱する必要があります。というのも、集団のなかに埋没した生活では、どうしても集団のルールに合わせて生活せざるを得ないからです。

社会のさまざまな単位が、集団から個人中心になることを、社会学では「個人化」と言います。ウルリッヒ・ベックという社会学者が1980年代に提唱しました。個人化には、共有から私有へといった物的側面の個人化と、個々人の意見の尊重などに代表される思想的側面の個人化があります。日本では、1990年代後半から個人化が進んできたと言われています。

「人それぞれ」が浸透した社会は、個人化が進んだ社会と言い換えることもできます。そこで本書では、議論の手始めとして、「人それぞれの社会」が成立した条件から見ていきましょう。

集団的な体質から抜けだし、「一人」になるためには、物的あるいは思想的条件を整えなければなりません。まず、それぞれについて見ていきます。

物的条件は、物質的に豊かになることで達成されます。ものの不足を共有によりまかなってきた時代、集団から抜け出し一人になることは、容易ではありませんでした。たとえば、農村では、道、河川、林など、あらゆるものを共同で管理し、共同で使ってきました。人びとは互いに協力することで、それぞれの生命を維持してきたのです。

このような社会では、集団のルールを守ることが何より重要です。というのも、ルールを破る行為は、他者の生命を危険にさらすからです。ゆえに、集団から抜け出し、一人の生活を楽しむには、あるていどの物の豊かさが必要だったのです。

とはいえ、「一人」になれるほどの豊かさは、そう簡単には得られません。日本人の多くが一人の生活を楽しめるようになったのは、第二次世界大戦後の高度経済成長あたりからです。それまでの日本は、農業人口が大多数を占める農村社会でした。70年くらい前まで、日本は、集団的特質がかなり強い社会だったのです。

1960～70年代に入ると、経済成長とともに、家族団らんの場としてのお茶の間が家庭から消えていきます。それと引き換えに、それぞれの家には個室が配置されるようになりました。日本社会が「消費社会」と

言われるようになるのも 1970 年代あたりからです。

1970 年代の後半には、それぞれの部屋にテレビが設置されるようになり、1980 年代後半から 90 年代に入ると、各部屋にはルームエアコンまでもが配備されるようになりました。1990 年代後半には、パソコン、携帯電話といった情報通信機器が爆発的に普及していきます。

総務省の『通信利用動向調査』によると、2018 年には、79.2%の人がスマートフォンをもち、46.1%の人が携帯電話をもっています。さまざまな進歩の結果として、私たちは、快適な個室で情報機器を駆使しつつ、身体的に接していない「ソト」の人や場とつながる自由を手にしました。

物の豊かさは、私たちから、物品の貸し借りの手続き、管理方法の決定といった調整コストの多くを省いてくれます。テレビが複数台あれば、チャンネル争いをする必要はありません。「人それぞれ」に好きなものを見ることができます。

同時に、機械技術が進歩することで、これまで共同でやらなければできなかったことも、一人でできるようになりました。さらに、生活サービスが充実することで、機械にゆだねることのできない行為も、お金で購入できるようになっていきます。今や、一定の資産をもち、通信環境を整えれば、人と会わない生活も可能です。

一定の資産がない人を救う社会保障制度も、ほころびの多さは指摘されるものの、着実に整えられてはいきました。私たちの生きる時代は、閉鎖的な集団に同化・埋没することで生活を維持していたムラ社会の時代とは違うのです。私たちの生活は、身近な人間関係のなかにではなく、お金を使うことで得られる商品・サービスと、行政の社会保障にゆだねられているのです。

もう一方の思想的条件とは、「一人」あるいは「個人」の生活を後押しする考え方の拡(ひろ)がりです。代表として、人権思想や自由主義思想があげられます。

もともと、身分制度との戦いを目的とした人権運動は、ヨーロッパ、アメリカを中心に広まっていきました。この人権の思想も、第二次世界大戦後の 1948 年に「世界人権宣言」という形で、世界に拡散していきます。(中略)

もう一方の自由主義思想は、「他者への危害」を加えないかぎり、個々人の自由をかぎりなく尊重することを提唱しています。そのため、人権思想と密接な関わりがあります。この思想もヨーロッパに起源をもち、ジョン・スチュアート・ミルが 1859 年に出版した『自由論』が有名です。私たちの憲法が保障するさまざまな「自由」も、こういった思想を背景としています。

人びとの主義・信条・行為を尊重する考え方は、学校の現場では個性の尊重という形で表れてきました。物的な豊かさを獲得した 1985 年には、臨時教育審議会の第一次答申で「個性重視の原則」が訴えられるようになります。

この頃は、国際競争が激しくなり、いじめも頻発し、画一的な日本の教育に厳しい視線が注がれていました。だからこそ、「自他の個性を尊重し、自他の個性を生かすこと」に注目が集まったのです。

個性の尊重は、その後も、私たちの社会に共通の価値観として重んじられていきます。進路指導は、教員側からの一方的な指導ではなく、児童・生徒個々人の「やりたいこと」に注目するようになりました。「や

りたいこと」への注目は、教育の場にかぎったことではありません。1980 年代には「自分探し」がひとつのブームとなります。

人びとが「やりたいこと」を重視するようになれば、集団の拘束力は必然的に弱まります。というのも、人びとは、集団の意向を重視せずに、個々人の「やりたいこと」を優先するようになるからです。こうして、物的にも思想的にも「一人」になりやすくなる条件が整いました。

2000 年代に入ると、個性の尊重の流れに多様性尊重の流れも加わります。この流れとともに、今までマイノリティとみられてきた人びとの権利を見直す機運が高まりました。同時に、さまざまな志向も「多様な志向のなかのひとつ」として受け入れられるようになっていきます。多様性尊重の流れは、2000 年以前からもあったのですが、日本社会で明確に意識され出したのは、2000 年代以降といってよいでしょう。

そこにさらに社会からの後押しも加わります。農村社会から脱した私たちは、物的に豊かになっていったものの、ただちに個人を単位とする生活に変わったわけではありません。農村社会の後の日本は、家族と会社という集団を中心に社会の仕組みを築いていきました。日本の経済の成長もあり、日本の会社の集団的な体質は、ときに賞賛の対象にもなりました。

家族と会社を中心とする日本社会には、1990 年代初頭まで、「定番のライフコース」とでもいうものが存在していました。たとえば、男性ならば、学校卒業後に就職し、そこから数年を経て結婚し、子どもをもち、稼ぎ手として仕事を全うするというものです。一方、女性ならば、いわゆる一般職に就職し、しばらく働いた後に結婚し、子どもが生まれた後は、家庭生活を中心に据えていく、という感じでしょうか。

しかし、このようなライフコースを実現することは、1990 年代後半には、難しくなってしまいました。50 歳時点で一度も結婚したことのない人の多さを表す 50 歳時未婚率（旧、生涯未婚率）は、男性は 1990 年代、女性は 2000 年代に急上昇をとげます。今や、誰もが結婚する時代ではありません。そもそも、結婚や家族のあり方じたいも多様になりました。

図１と図２は、結婚や出産にかんする意識について継続的に尋ねた『日本人の意識』調査（NHK放送文化研究所）の結果です。結婚については、「人は結婚するのが当たり前だ」と「必ずしも結婚する必要はない」という選択肢から、出産については、「結婚したら、子どもをもつのが当たり前だ」と「結婚しても、

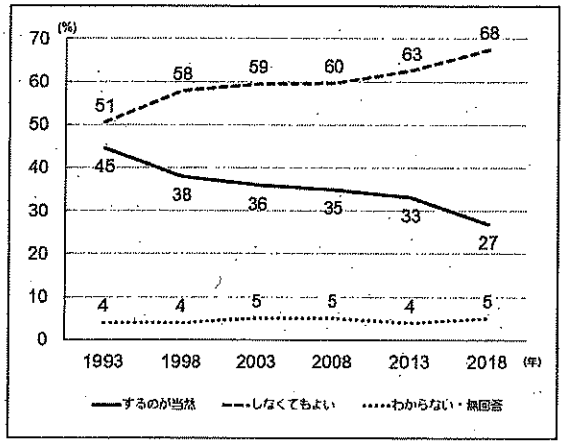

図１　結婚にかんする意識（「日本人の意識調査」から）

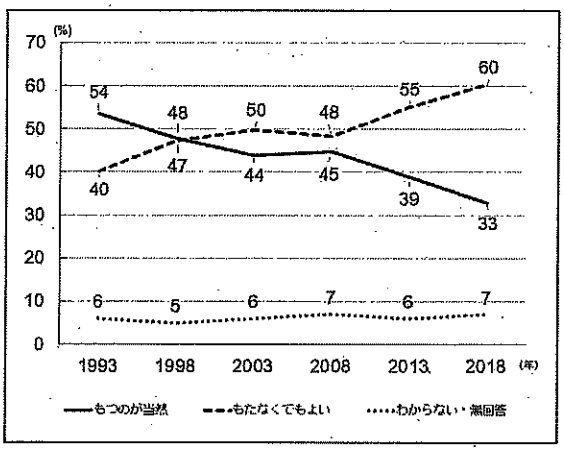

図２　出産にかんする意識（「日本人の意識調査」から）

必ずしも子どもをもたなくてもよい」という選択肢から選ぶ方式をとっています。(中略)

一生涯同じ会社に勤める終身雇用や、夫は外で働き妻は家を守るという性別役割分業も、今では過去のものとなりつつあります。女性の労働への進出が進み、今や専業主婦世帯は、日本社会の最大勢力ではありません。1990 年代後半の法改正で派遣社員が増えたことにより、終身雇用の体制は大きく揺らぎました。そもそも、ひとつの企業に継続して働こうという意識も、かなり弱まっています。

社会から「標準」とされるライフコースが失われれば、私たちは、否応なく、自らの人生を自身で設計しなければならなくなります。たとえ「やりたいこと」が明確であろうとも、なかろうとも、それぞれに「やりたいこと」を探して、人生を設計していかねばならないのです。学校の現場でも早くからキャリアプランをたてることが推奨されています。

それと並行して、選択できるライフスタイルの幅も広がりました。服装、食べ物、一日の過ごし方など、私たちの日常生活は、選択の機会にあふれています。このような状況だからこそ、個人・個性への注目はいっそう高まっていきます。というのも、選択の背後には、個々人のなんらかの意思がはたらいていると考えられるからです。ジャン・ボードリヤールは、このような社会を、日常生活が審美の対象になるという意味で、「日常生活の審美化」と呼んでいます。

ここまで述べてきた、個人化した社会や一人になれる社会は、「人それぞれ」という言葉と強い親和性があります。物的に豊かになったことで、私たちは、単純にものを「もつ」かどうかだけではなく、どのようなものをもつのか、選べるようになりました。つまり、なにをもつかは、「人それぞれ」になったのです。

選択できるライフスタイルの幅が広がったことで、どういった人生を歩むかも「人それぞれ」になりました。どのような家族をつくるか、そもそも、家族をつくるかつくらないかも、どのような仕事をするかも「人それぞれ」に選ぶことができます。

「一人」になれるようになったことで、人とのつき合い方も「人それぞれ」の余地が増えました。会社の懇親会やゼミの飲み会への参加も「人それぞれ」で、今や強制できる時代ではありません。一人で過ごすか、それとも、つながりのなかに入っていくかも「人それぞれ」になってきました。

では、今の社会は「個を尊重する社会」と言えるでしょうか。私たちが、拘束力が強く閉鎖的な集団を脱し、「一人」になることを求めた理由の奥底には、「集団ではなく個を尊重したい」という願望がありました。

たしかに、かつての社会より、多様な主義や信念は尊重されるようになりました。性的指向については、多様性に配慮する方向で変化が進んでいます。10 年前であれば、性的マイノリティを表す「ＬＧＢＴＱ」などといっても何のことか分からない人も多かったでしょう。

1980 年代であれば、結婚をしない人生を貫き通すことはけっこう大変だったかもしれません。結婚しない人に「一人前ではない」と厳しい言葉が投げかけられたり、昇進で差別されたりすることもありました。そう考えると、私たちは「個を尊重する社会」に生きているように感じます。

しかし、何でも自由に言えるようになったかというと、そうでもない気もします。たとえば、友人であっても気を遣って、なかなか深い話ができない、ということはないでしょうか。会社で管理職に就いている人

であれば、「今は何でもハラスメントにされてしまうから、部下とどう接したらいいかわからない」という人もいるでしょう。

「個を尊重する社会」というのは、一人ひとりがそれぞれに独立した意見をもち、それを率直にぶつけられる社会という意味合いもありました。誰もが、気を遣いつつも、率直に意見をぶつけ合うことで、よりよい社会を築いていく。そういった対話のある社会が目指されてきたのです。

果たしてそういった社会は実現できたのでしょうか。世の中を見渡してみると、実際に到来したのは、目の前の他者に対して意見や批判をすることを憚り、それぞれが自分の殻に閉じこもる社会、あるいは、検索をつうじて、互いに意見の合致している人のみが結びつき、意見の合わない人は寄せ付けない分断型の社会ではないかと思うこともあります。そこからは、個を尊重する姿勢を読み取ることはできません。

では、なぜこのようなことが起きてしまったのでしょうか。この謎を読み解く鍵として、本書では「人それぞれ」という言葉に着目します。

個人化と「人それぞれ」に強い親和性があるように、「人それぞれの社会」と「個を尊重する社会」は、じつは非常に近い位置にあります。というのも、「個を尊重」したからこそ、「人それぞれ」に陥ってしまう、ということがたびたびあるからです。詳しくみていきましょう。

「個を尊重する社会」とは、個々人の選択や決定を尊重する社会です。「一人」の生活の浸透とともに、生活のさまざまな場面で、個人の希望や選択がとりわけ重視されるようになりました。私たちは、集団ではなく自らの意思にしたがって、なんらかの行動を起こすことができるようになったのです。

このような社会では、いわゆる「べき論」を使って、相手の行為や主義・信条に申し立てをすることはあまりできません。具体的に言うと、「男性ならばこうあるべき」、「部下ならばこうあるべき」などといった形で、なんらかのカテゴリーを持ち出して他者に意見をすることは、こんにちでは容易ではないのです。皆さんも思い当たるのではないでしょうか。他者が表出した意見や行動は、いったん受け止めるというのが、個を尊重する社会の流儀なのです。

このように、個人の希望や選択が重視されるようになると、誰かの希望や選択に対して、否定的な意見をなかなか言い出せなくなります。というのも、相手の考えを否定する行為は、「相手の考えや行動を尊重しない行為」と解釈されかねないからです。だからこそ私たちは、相手の考え方や行動を否定しないよう細心の注意を払います。

このような傾向は、若者の友人関係に顕著に表れています。日本では、1980 年代から、友人と深く関わろうとせず、互いに傷つけ合わずに、場を円滑にやり過ごすことに重きをおく友人関係が目立つようになりました。土井隆義さんはこのような友人関係を、お互いの感覚のみに依拠し、相手を傷つけないよう過剰に配慮する「優しい関係」と表現しています。場を円滑にやり過ごすには、相手を否定しない、あるいは、傷つけないコミュニケーションの技法が有効なのです。

とはいえ、「否定しない」というのは、そう簡単にできることではありません。もちろん、明確な否定表現や中傷表現は避ける、「べき論」は避けるといった形で、簡単な予防は可能です。しかし、相手を否定したかどうかの判定は、多くのコミュニケーションにおいて、曖昧な領域に留め置かれたままです。というのも、なんらかの表現に対する否定判定は、結局のところ、発せられた言葉や行動を受け止める相手の気持ち

にゆだねられているからです。

たとえば、友だちから進路についての相談を受けたとしましょう。このとき、友だちの話す進路について「あまりよくない」と思ったとしても、それを伝えるのは容易ではありません。伝え方によっては、相手に「自分のことを否定された」と思われるかもしれないからです。もっと簡単な例で言うと、相手を褒めたつもりだったのに、反対の受け取られ方をする、ということは珍しくないでしょう。

このような状況は、私たちに非常に厄介な課題を突きつけます。私たちは、コミュニケーションの正解が見えないなか、相手の感情を損なう表現を避けつつ、その場を穏便にやり過ごすよう求められているのです。このような場で重宝されるのが「人それぞれ」という表現、または立ち位置です。「人それぞれ」という言葉は、相手の意向を損なわずに受容するという難題に対して、最適解を提供してくれます。

相手の考え方に違和感をもったとしても、「人それぞれ」と言っておけば、ひとまず対立を回避して、その場を取り繕うことができます。「べき論」を使って、規範を押しつけてくる人よりも、「人それぞれ」と言って、相手を受け入れてくれる人のほうが好まれるでしょう。私たちは「人それぞれ」という言葉を使うことで、さまざまな場を穏便にやり過ごしているのです。

では、このような社会は、お互いの主義・主張を、批判も含めためらいなくぶつけられる「個を尊重する社会」と言いうるでしょうか。私には、主義・主張をぶつけ合うことよりも、対立を回避するために、他者に対する批判や意見を憚り、気を遣い合うことに重きをおいている社会に見えます。

対立を回避するために、他者に対する批判や意見を憚り、気を遣い合うことに重きをおく社会を、「人それぞれの社会」としておきましょう。本書では、この「人それぞれの社会」に焦点をあて、身近な人間関係や社会について考察していきます。

出典：

〈問題文〉石田光規（2022）『「人それぞれ」がさみしい 「やさしく・冷たい」人間関係を考える』筑摩書房より抜粋、表記および図の体裁を一部改変

〈資料〉森絵都（2018）『クラスメイツ〈前期〉』KADOKAWA より抜粋、一部改変

設問1　〈問題文〉の著者は図1および図2を使って、どのようなことを論じているのか説明しなさい。論述の際には、図1および図2が示す特徴を含めて、251字以上300字以内で述べること。なお、英数字や記号は解答用紙1マスにつき2文字まで記述してよい。　(70点)

設問2　「個を尊重する社会」と「人それぞれの社会」の似ていることと異なっていることについて、問題文の主旨を踏まえ、126字以上150字以内で説明しなさい。　(80点)

設問3　なぜ「個を尊重する」からこそ「人それぞれ」に陥ってしまうのか、〈問題文〉の主旨にもとづいて説明しなさい。さらに、〈資料〉の登場人物「しほりん」の「レイミー」への関わり方は、「個を尊重する」からこそ「人それぞれ」に陥ってしまっているのかどうか、理由を含めて説明しなさい。なお、601字以上700字以内で述べること。　(250点)

〈資料〉

2　光のなかの影　しほりん

吹奏楽部へ入ってから、しほりんはますます学校が楽しくなった。
教室ではクラスの友達が、放課後の音楽室では部活のみんなが、しほりん、しほりんとあたりまえみたいに声をかけてくれる。いつでも誰かがそばにいる。
それだけで、中学校という場所はしほりんにとって、まぶしすぎるくらいきらきらしていた。あたたかすぎるくらいほかほかしていた。
でも——ふっとひとりになった瞬間、今でも、急に怖くなる。
このまぶしさはいつまで続くんだろう。
このぬくもりはいつまで続くんだろう。
千鶴とレイミーは、いつまであたしのそばにいてくれるんだろう？

本音を言えば、女子の仲よし三人組なんてろくなものじゃない、としほりんは思っている。とにかく、奇数はいけない。これは鉄則だ。しかも、よりによってまた三人組だなんて不運すぎる。
千鶴やレイミーと三人でいると、しほりんはどうしても思いだしてしまう。忘れたい記憶。今でも傷口は生々しくて、かさぶたにすらなっていない。
小六の秋に、突然、親友の真衣と杏から仲間外れにされた。何をするにも三人一緒だったのに、しほりんが風邪で学校を休んでいるあいだに、ふたりは別人みたいに変わってしまった。自分のどこが悪いのか。どう改めればいいのか。何を聞いても答えてくれない。そのうえ、ふたりはあることないことしほりんの悪口を言いふらし、気がつくと、クラスの女子の半数は口をきいてくれなくなっていた。教室が氷の牢獄となった。
逃げたら、負け。学校を休んじゃいけない。我慢して、我慢して、やっとのことで小学校を卒業した。
気絶しそうなくらい緊張した北見二中の入学式。小六のころに自分を無視していた女子が一年A組にひとりもいないのを知ったとき、だから、しほりんは涙が出るほどほっとしたのだった。
初日から、前の席の千鶴が積極的に話しかけてくれたのもラッキーだった。この子となら仲よくなれそう。不安でいっぱいの中学生活に光がさしこんだ。
ところが、安心したのもつかのま、そこには不吉な影がまじった。
北小出身者たちから「ふしぎちゃん」と言われているレイミーが、やたらと千鶴についてまわるようになったのだ。
元クラスメイトのレイミーを、千鶴は自然に受けいれた。しほりんも露骨にいやな顔はできず、結局、絶対に避けたかった三人組として定着してしまった。
以来、しほりんは何かにつけてレイミーを意識し、警戒してしまう。
自分のいないところで千鶴とレイミーが仲よくしすぎていないか。
しほりんってちょっとね、なんて悪口を言いだしていないか。
毎日びくびくと神経をとがらせている。千鶴とレイミーがふたりでトイレに行ったり、しほりんの知らない北小時代の話を口にしたりするたび、不安で不安で、泣きたくなる。あわててレイミーの知らない吹奏楽部の話題をもちだし、挽回を図ってみたりもする。
レイミーもレイミーで、気のせいか、しほりんに対抗している節もある。
「ね、千鶴、生玉子の一気飲みってできる？　しほりんは？」
「千鶴、ネギ畑の妖精、見たことある？　しほりんは？」
「千鶴は甘いカレーライスと辛いチョコレートパフェと、どっちか絶対に完食しなきゃいけないって言われたら、どっち？　しほりんは？」
しほりんは？　と聞かれるたびに、いかにもついでに話をふられているような気がして、しほりんは内心むっとした。意味のわからない質問にもイラついて、つっけんどんな声を返してしまうこともある。いったん機嫌を損ねると、しほりんは修復に時間がかかる。空気をこわしているとわかっていても、思うようにスイッチを切りかえられない。
レイミーさえいなければ。
気の安まらない毎日のなかで、いけないとは思いながらも、しほりんは心のどこかでいつも願っていた。
レイミーさえいなければ、嫉妬にも、自己嫌悪にも苦しまないですむのに。
千鶴とふたり、影のない光のなかだけにいられるのに。

その思いが届いたかのように、レイミーの身にある事件がふりかかったのは、五月の半ばのことだった。

始業のベルが鳴る三分前に教室へ入った瞬間から、いつもとちがう気配は感じていた。

静かすぎる。いつもなら、男子は後ろのほうでわいわい、女子はあちこちでぺちゃくちゃやっているのに、今朝はそのざわめきがない。みんながまだ新しい一日にうまく足をおろしていないみたいな、朝の教室につきものの浮いた感じもない。

おかしいな。教室を見まわしたしほりんは、その原因に気がついた。

レイミーが机にうつぶして泣いていた。千鶴をはじめ、数人の女子たちがそのまわりを囲んでいる。

教室で誰かが泣いている姿は、別段、めずらしいものでもない。箸が転んでもおかしい年ごろは、机の落書きひとつに泣きたい年ごろでもある。が、相手があのレイミーとなると話はべつだ。いったい何があったのか。

「どうしたの」

急ぎ足で歩みより、レイミーの背中をさすっていた千鶴にたずねると、

「それが……」

「ひどいことされて。見てよ、これ」

千鶴が答えるよりも早く、横から一枚の紙をさしだしたのは、久保さんだ。

「誰かの書きこみ」

「書きこみ?」

『北見二中広場』ってウェブサイト、知らない? うちの中学の生徒会が運営してるんだけど、あれ、うちの姉が管理人なの。姉は生徒会の書記だから。で、きのう、情報交換コーナーにこんな書きこみがあったらしくて」

しほりんが目を走らせた紙には、こうあった。

『ぼくのクラスにはふしぎちゃんがいます。なんと、ねずみのぬいぐるみ(名前はシューマイ)と毎日、話をしてるんだそうです。とくに、くもりのち晴れの日は会話がはずむそうです(ほんまかいな?)。みなさんのクラスにはこんなふしぎちゃんいますか~???』

誰のことかは考えるまでもなかった。ねずみのぬいぐるみの話は、しほりんもしょっちゅうレイミーから聞かされている。ただのぬいぐるみではなく、ただのねずみでもなく、家族の一員らしい。

「ひどくない? 書きこみは姉が削除したけど、わたし、その前にこうして証拠をとっといたの。これ書きこんだの、絶対、うちのクラスの誰かでしょ。許せない」

久保さんは鼻息を荒くして怒っている。生活委員の彼女は一年A組の番人みたいな子で、日ごろから「前髪が長い」「爪がのびてる」などと、クラスのみんなに口うるさい。

「なのにみんな、先生には言わないほうがいいって言うの。言わなきゃ犯人も見つからないのに。ねえ?」

ねえ、と話をふられて、しほりんはこまった。

よく見ると、レイミーを囲む女子の多くがこまった顔をしている。

たしかに、クラスメイトをからかうようなコメントを、生徒会のサイトに書きこんだのはよくない、としほりんも思う。でも、書かれている内容に、それほど悪意があるとも思えなかった。

「先生に言って、どうすんの」

返事をためらうしほりんに代わって口を開いたのは、里緒(りお)だ。

「どうって、犯人を捜してもらうのよ」

「先生に言ったら見つかると思う?」

「え」

「だって、犯人がA組にいるとしたら、レイミーが泣いてるの見て、しらばっくれてるわけでしょ。先生が何を言ってもムダだとあたしは思うけど。それに、先生が出てきたりして騒ぎが大きくなったら、レイミー、逆にもっと傷つくかもしれないし」

「なんで傷つくの?」

「なんでって……」

「このままにしちゃうほうが傷つくんじゃないの」

「タイム。どっちの言ってることもわかるけど、ちょっと落ちつこうよ」

仲裁に入った副委員長の真琴を、久保さんがキッとにらみつける。

「落ちついてます。それより、あなたはどう思うの」

「うーん、むずかしいな。もちろん、あんな書きこみはよくないけど、レイミーの名前とか書いてるわけじゃないし、いじわるな気持ちじゃなかったのかもしれないし」

「うん、あたしもそう思う」
真琴と仲のいいこのちゃんがうなずくと、
「犯人でもないのに、なんでわかるわけ？」
今度は久保さんと親しい日向子が口をはさんだ。
「ウチは久保さんに賛成。先生に言って、犯人を見つけて、レイミーに謝らせなくっちゃ」
「犯人捜しをするってこと？」
「モチ。こういうのを放っておくからいじめに発展するわけだし、副委員長がそんな弱気じゃダメだよ」
「まこちゃんは弱気なわけじゃないと思うよ」
真琴に味方するこのちゃんと、久保さんに味方する日向子。それにつられて、まわりの女子たちも〈犯人追及派〉と〈そこまでやらなくても派〉に二分し、言いあいをはじめた。あっちでもこっちでも意見がぶつかり、これでは収拾がつきそうにない。
「千鶴、どう思う？」
早くしないと先生が来てしまう。あせりはじめたしほりんの問いに、千鶴は「うーん」と首をひねった。
「わかんない。でも、大切なのはレイミーの……」
「そうだよね。レイミーの気持ちだよね」
千鶴もしほりんとおなじことを考えていたようだ。
そこで、まだしゃくりあげているレイミーに顔を寄せ、ふたりで聞いてみた。
「ね、レイミーはどうしたい？」
「先生に言って、犯人、見つけたい？」
ぴくぴく震えていた背中が静止した。ゆらりと頭を起こしたレイミーは、涙と鼻水だらけの顔でふたりに訴えた。
「先生には、言わないで。それより、みんなに言ってほしい」
「なんて？」
「犯人への要求」
涙声でささやかれたその「要求」に、しほりんと千鶴は唖然とした。
「レイミー、本気？」
「正気？　それ、ほんとにみんなに言うの？」
レイミーの意志はかたい。涙の訴えをむげにもできず、しほりんと千鶴は目と目で相談した。
どっちが言う？
無言でその大役を譲りあったあと、先に折れたのは千鶴だ。
「わかった。わたしが言う」
覚悟をしたように深呼吸をし、千鶴が教室の後ろをふりかえる。日ごろ、人前でものを言うタイプじゃないその声は細くて頼りない。
「みなさん、聞いてください」
事のなりゆきを気にしていた男子たちの視線が千鶴に集中した。
「とっくに聞き耳、立ててまーす」
お笑いキャラの心平がおどけた声をあげ、
「ぼくもでーす」
お調子者の蒼太がそれに続く。
「レイミーは、あの書きこみをした人に要求があるそうです」
ポニーテールの襟足を真っ赤に染めて、千鶴は一気に最後まで言った。
「ぬいぐるみの名前は、シューマイではなくて、シューマッハなのだそうです。ドイツ出身だそうです。だから、あれを書いた人に、今日中に訂正の書きこみをしてほしいそうです。自分はいいけど、シューマッハには謝罪してほしいそうです」
千鶴が伝言を終えたとき、教室にはかつてないほど奇妙な静寂が立ちこめていた。
「ほんまもんのふしぎちゃんや……負けた」
心平がつぶやいた。

翌朝。目覚めてすぐにしほりんは居間のパソコンを立ちあげ、生徒会のウェブサイトをのぞいた。
思ったとおり、情報交換コーナーにシューマッハへの謝罪文はなかった。そのせいかどうかはわからないけれど、その朝、一年A組の教室にレイミーの姿はなかった。
「書きこみ、なかったな、やっぱり」
「ま、ねえよな。ふつうに考えて」
「ぬいぐるみに謝れって言われてもな」
犯人だと女子から決めつけられている男子たちは、この一件を軽く笑いとばすこと

で、居心地の悪さを払っているようでもある。女子も女子で、レイミーに同情しながらも、本気で犯人捜しをするほど深刻にはなれない様子。そうこうしているうちに、授業中、近藤慎也がキレて教室を飛びだすという新たな事件が勃発し、シューマッハ事件は過去の珍騒動として流されていったのだった。

しかし、クラスのみんなが忘れても、傷ついた本人は忘れない。しほりんの頭からも、きのう、ずっと泣いていたレイミーの姿が離れなかった。いつも能天気な彼女が、あんなにしょげているのを見たのは初めてだった。

意外と、ふつうのところもあったんだ……。

中学に入って一ヶ月と少し、いつも一緒にいたはずなのに、いざレイミーの机が空席になると、そこに座っていた女の子のことを自分は何も知らなかった気がする。

「鈴木さんは腹痛ですって。大事をとって休ませますって、お母さんから電話がありました」

藤田先生からそう聞くと、しほりんはますます落ちつきをなくした。

腹痛？　本当に？　仮病じゃなくて？

胸がざわめく。授業にも身が入らず、ふと気がつくと、レイミーの空席ばかりをながめている。そんな自分がしほりんには驚きでもあった。

レイミーさえいなければとあんなに願っていたのに、いざ教室から彼女がいなくなっても、それほど心が浮きたたない。むしろ、歯磨き粉をつけないで歯を磨いているみたいな物足りなさがつきまとう。千鶴を独占できてうれしくないと言ったらうそになるけれど、ふたりきりになったらなったで、おたがいに沈黙を気にしてからまわりしたり、へんに疲れてしまったりもする。

思えば、レイミーはいつもふたりを笑わせてくれた。「しほりんは？」と問いかけるまんまるの瞳。あれだって、彼女なりに気をつかっていた証拠かもしれない。

このままレイミーが学校に来なくなったら、本当にあたしは不安から解放される？

千鶴とふたりきりの時間がすぎるにつれて、しほりんはそんなふうにも思いはじめた。

そもそも、千鶴とレイミーは、理由もなしに突然、あたしを仲間外れにするような子たちなの？

考えるほどに、自分がいやになっていく。少なくとも、レイミーは学校を休んでいる今も、仲間外れにされるなんて心配はちっともしていないはず。

そうだ、としほりんは気がついた。あたしを不安にさせる影は、レイミーでも千鶴でもない、あたしが自分でこしらえたものだ――。

小六の教室で真衣や杏から無視されていたころ、しほりんはそこから消えていなくなってしまいたかったけれど、それでも、負けずに留まった。一日も休まずに学校へ通いつづけた。強くなりたいと願って、卒業したときは強くなった気がした。

でも、その一方で、べつのところが弱くなっていたのかもしれない。

何かに勝ったつもりで、何かに負けていたのかもしれない。

その放課後、しほりんは千鶴に宣言した。

「あたし、今日の部活は休む」

「え、なんで？」

「レイミーの家、行ってみようかなって」

何度か瞳を瞬いたあと、千鶴は「そっか」とにっこりした。その日一番の晴れやかな笑顔。

「じゃ、わたしも行く」

正直、しほりんにはその笑顔がどこかさびしくもあった。

やっぱり、あたしだけじゃダメなのかな。ふたりきりより三人のほうがいいのかな。

きっと、これからも三人でいつづけるかぎり、ときどき、こんなふうになるのだろう。たまらなく不安になることも、嫉妬に苦しむことも、自分が嫌いになることもあるだろう。

ざらざらとした心でしほりんは思う。でも――。

それでも、友達は信じたい。